特選
2020
文部科学
大臣賞

第53回「おかねの作文」コンクール

心に栄養を

宮崎県・宮崎市立加納中学校　２年　瀬戸口　麗

「ドーン。ドーン。」
今週も、またどこかで花火が上がった。どこで上がっているのかは分からない。時間も短い。でも、私の心を明るく、ウキウキとさせてくれる。

今年は、新型コロナウイルスの影響で、オリンピック、夏を感じる夏の甲子園大会、とても楽しみにしていたお祭りや花火大会などのイベントが次々と中止となり、なんだかみんながどんよりとした気持ちのまま日々を過ごしている。そんな時、いつもテレビを見ない母がチラッとテレビを見て、
「あっ。この方知っている方だ。へぇー、花火屋さんもしているんだね。こんな時だからこそ、花火で宮崎を元気にしようなんていいアイデアだね。」
と言った。

６月１日に全国各地で一斉に花火が上がった。母の知るこの花火屋さんもこのプロジェクトに参加した一人で、打ち終わった後に今までにない声援や歓声をうけて、本当に心が熱くなり、花火は人の心を動かすんだなと改めて感じたようだった。このプロジェクトを１回きりで終わらせるべきではない。宮崎の夜空に花火を打ち上げて、もう一度、みんなに元気を取り戻してもらいたいという気持ちがふつふつと湧き、新しい生活様式の中での、新しい花火スタイルを提案したプロジェクトだった。クラウドファンディングに挑戦し、みんなから温かい寄付金を募り、毎週土曜日、合計７回、毎回 10 ～ 15 分程度の花火が上がれば、それぞれ都合がいい時に見に行けるし、市内中心部とだけお知らせして、正確な打ち上げ場所をお知らせしないことで三密を避けて見ることができるという内容だった[注)]。

私はこのプロジェクトを見た時に、みんなを元気にするために自分に何ができるのか、自分にできるやり方で宮崎のみんなを笑顔にし、一緒に顔を上げて前に進んでいこうと自ら進んで行動できる花火屋さんの熱い考えが素敵だなと

© 金融広報中央委員会2020

思った。また、共感した人達が、応援する気持ちを寄付という形にして参加できるというところにも惹(ひ)かれた。

寄付金額は、私の持っているお小遣いだけでは足りなかったけれど、どうしても寄付をしてみたくなり、

「お小遣い足りないけど、私もしてみたいな。」

と母に小声で伝えてみた。すると母は、

「お母さんもしてみようかなと思ってた。みんなが明るくなればいいんじゃない。」

と寄付に協力をしてくれることになり、少しの金額だったが寄付をしてみることにした。まだ寄付をしたばかりで、私の寄付金での打ち上げ花火はまだだと思う。でも、もうすぐ上がるかなという楽しみもある。その日を楽しみに日々を過ごしたいと思う。

100円でも、1,000円でも、1万円でも、10万円でもお金の使い方は人それぞれだが、心に栄養を与えてくれる、そして一緒に生きているんだと感じることができるのが活きたお金の使い方ではないかと私は思う。私が寄付をした時に、現在の支援総額を見てみると、目標金額はとっくに超えていて、熱い花火屋さんの気持ちに共感して一緒に花火を打ち上げたい、花火屋さんを応援したいと思った人達がたくさんいるんだなと感じた。

今回の寄付を通して、寄付の形はいろいろあるけど、クラウドファンディングという寄付の形もあるんだなということを学んだ。そして、私が寄付をしたことで花火が上がるということが私の心を晴れやかにしてくれた。また、たまたまその花火を見た他の誰かが私と同じように笑顔になって、少しでも晴れやかな心になっているのかなと思うと、私も嬉(うれ)しくなる。

「心に栄養を」ということを考えると、自分の欲しいものを買ったり、美味(おい)しいものを食べたりして、自分が次のステップに行けるのであれば、それは、活きたお金の使い方だと思う。けれども、寄付をすることによって、「応援する気持ちのおすそ分け」という心の満足感が得られる活きたお金の使い方もあることを知った。

（注）ＣＡＭＰＦＩＲＥ　「みんなで宮崎の夜空に花火を！コロナ退散の花火を毎週打ち上げたい」
URL　https://camp-fire.jp/projects/view/304923
閲覧日 2020年8月16日

© 金融広報中央委員会2020